

蔵王山安善寺

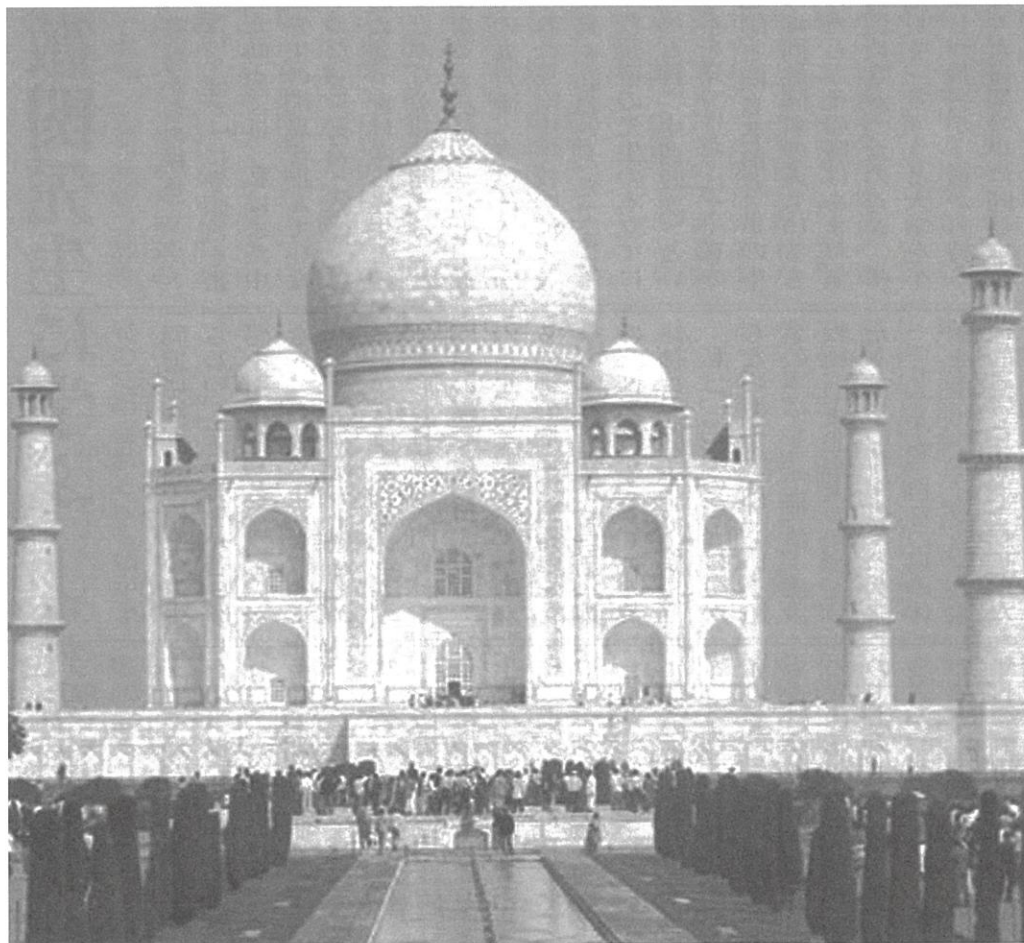
◆編集・発行人◆
近藤龍弘

〒940-0052
長岡市神田町1丁目4番10
TEL.0258-32-2811

◆スタッフ◆

小林国二・小林善秋・高橋潔
室賀清輝・高橋利春・加瀬由起子
近藤マリ子・近藤真弘・近藤善信

後援・株式会社アサヒ
印刷・(株)北越時報社



世界遺産のタージマハル

ご家族の皆さままでご覧ください

「インド仏跡巡拝の旅」で感じたこと

翠巖龍弘

日にく境内地の雪も消えはじめ、庭の木々の根元には土が見えてきました。そこには路の墓が顔を出し雪国長岡もようやく春の到来です。去る二月廿一日〜廿七日まで、一行十七名でインド仏跡巡拝の旅に行つて参りました。私は昭和五十二年、昭和五十八年につづく三度目のインドの旅でしたが、当然の事とはいえ宿泊ホテル、食事、バス等、大変良くなり、また自動車の数も大幅に増えたため渋滞も多く、ニューデリーでは地下鉄の工事も進んでおり、タージマハルやアグラ城などの観光地では、インド人の観光客も大変多く、経済発展し一般の国民が豊かになって来ている様子が肌で感じられる旅でした。

都会と地方の較差も相当あるようです。しかし田舎でも建築中の家も多く見られ、徐々に地方も変わっていく様子。次回訪問した時にはどんなに変化しているかと楽しみにもあります。

身体も胃腸も疲れ、下痢を心配してまで何度でも行きたくなるインドの魅力とは何でしょうか？ 仏教徒として釈尊の関係地であることは当然であります。他に歴史の重さ・釈尊在世当時国内でも一位・二位を争う王舎城のあったマカダ国が、現在では国内でも貧しい地方の一つに変わった姿などを通して素直に観じられる無常・牛・馬・羊・犬・猿などが人間と混然と道路上でいられる景色・異文化等々。数多くの理由があるように思われますが、日本人が忘れてしまったもの、失った大事なことに気付かされるが多数あるのではないかと思います。

インド人の神々への信心とその生活。電気のない商店のロソクやランプの明り、電気がきいても家々の玄関の豆電球くらいの明り、小さな明りがこんなに明るいことへの気付き。無菌状態に馴らされた日本人の抵抗力の低下、ひよつとすると私をはじめ日本人が世界で一番身体の抵抗力のない国民になったのではと心配になりました。

日本では家庭でも旅館でも高速道路のパーキングのトイレでもウォッシュヤーがあり、私もすっかり馴らされ、今回も旅行用携帯ウォッシュヤーを持参するような始末。便利で快適な生活、清潔なことは素晴らしい事ではあります。それに馴れすぎると順応力の低下につながると深く考えさせられました。

今回の巡拝の旅で、釋尊が多くの法を説かれた靈鷲山の頂で参加者全員で線香を供え「般若心経」を誦読させて戴きました。二千数百年前を思惟し、感慨無量の一時を過ごし、世界平和を祈念させて戴きました。

徹関先生に学ぶ — 中村先生を偲んで — (二) 西澤 正元

(前号からの続き)

「はくぼく」に巻頭言を書いた時点では、私はまだ中西先生の消息を掴んでいなかった。ところがこの後、思わぬきっかけから先生とのつながりが急展開することになる。その年、昭和五十五年の九月頃、今は故人になられた見附中学校の河本茂校長を訪ねたときである。

校長室の先生の本立てに『弓と禅 中西政次』という本を見つけた。はて、私の恩師と同じ名前だ。世の中には同姓同名の人もいるものだと、その時はあまり気に留めなかったのだが、帰宅して、ちょうど大学を卒業した長男が下宿から持ち帰った書架の中に同じ本を発見したのである。

偶然の符号と言えない何かを感じた私は、早速「弓と禅」(昭和四十四年初版、五十二年増補版・春秋社)の本を手にとって奥付の著者の略歴を見た。なんと九分九厘、

間違いなく恩師の中西先生らしい。ただ、先生が若い頃弓を引かれたという記憶がなかったので本文を繰ってみると、先生は五十過ぎてから、日本に唯一、禅心の弓を引く無形心月流に入門されて弓道の極意を会得するまでの十年近い道程と、若い頃からの禅の悟道の道程とを合一された射道見性(自己本具の心性を徹見すること)の苦修練行の体験手記であった。

私は、弓道のことは分からないが、「弓と禅」という題名の本はもう一冊、第一次大戦後、旧東北帝大の教師をしたドイツの哲学者オイゲン・ヘリゲルが、自身の弓の体験をもとに、ドイツ哲学の論理的思考と、論理を超越した弓道の見性悟達の禅の世界を書いた有名な本がある。長男に聞くと、両書とも弓道修業者の必読書だという。

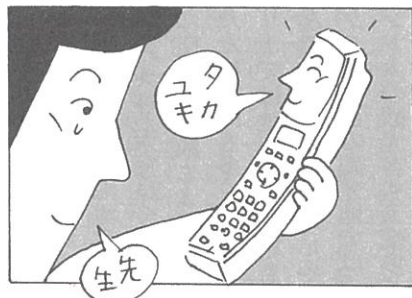
我が恩師はそんな偉い先生になっておられたのか。私は胸の熱くなる思いがした。

翌々月の十一月、全国連合小学校長会が大阪で開かれた。その大会に参加した私は、絶好の機会と思いついて中西先生を訪ねることにした。

大阪の宿から四十五年振りの電話をかけた。何と切り出そうかと緊張していた私だったが、先生は私の名を聞くとき意外にも私のことはよく覚えていたとおっしゃった。その理由の一つは「正元」を「タカユキ」と読む難解な私の名前にあつた。あまりにも奇妙な読みかたなので、私の父に確かめたと言われたのである。私はホッとして閉会式が終わった翌日、第二の故郷、姫路へ廻り、四十五年目の師弟の再会が実現したのである。

先生のお宅は、戦後、新興住宅団地が変わってしまったが、中心部から少し離れた昔の農村部にあつた。私は一度、父に連れられて訪問した四十五年前の、土塀

のまわった農家の記憶が残っていた。今も外見は変わっていない。



のまわった農家の記憶が残っていた。今も外見は変わっていない。

育に情熱を傾けて来られた先生の片言隻句に教えられたことが多かった。私は持参した「弓と禅」の本に長男のために署名をいただき、先生からは新たに出版された「教育と禅」(昭和五十五年・春秋社)の本を頂戴して辞去した。



東京に住む野里小学校当時の親友木村君も、中西先生の担任であった。木村君の父は、旧制姫路高等学校の校長をされていた。私は十二月に入つて、四十五年振りの中西先生との再会の報告を兼ねて、木村君の自宅を訪れた。話の途中で彼は一冊の和綴じの本を取り出してきた。それは、K君のなき父がK君のために、小学校の先生方から貰つておいた署名帳であった。伊藤俊二、箭吹仙太郎両校長先生の連署があつた。その次のページに楷書で、「吾は何者 中西政次」と書いた先生の筆跡があつた。その次の年を担任していただいた改発功先生(まだご健在で

ある)の「正法眼蔵」からの引用文がきれいな行書で綴られていた。

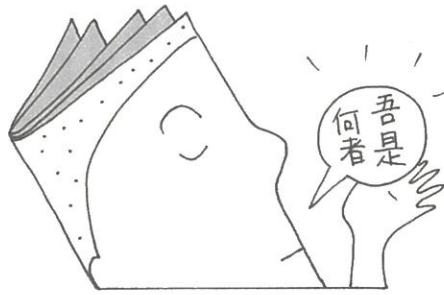
中西先生は、小学四年、十一歳の時に両親と死別し、兄弟五人は四散してそれぞれ親戚に預けられるという悲運に遭う。長男であつた先生は、子供のいなかった叔父夫婦が養ひ親となつて成長した。先生は、こうした不幸な生い立ちから内向的な青年期を迎えて、自己と人生について苦悶し煩悶する。姫路師範在学中は問題生徒であつたという。しかし、優れた先生方の慈愛溢れる導きで危機を乗り越え、昭和二年に師範を卒業、新卒として私の母校、野里小学校に赴任する。そこで先生は師範在学中の恩師の「自他の区別のない愛に生きるには、自己を深化し、大いなる自己…大我…に自己を高めることである」と諭された言葉から、自分の進む道を倫理、哲学、宗教に求め、一念発起して当時最も難関といわれた文検、文部省検定の修身科合格を目指して猛勉強する。苦節六年、昭和

八年に見事に合格する。ところが先生は、天にも昇る喜びの中に、突然空洞のような虚しさを感じたという。それは、文検を志したそもその願いが「無私大我への自己成長」であったのに、そうした人格的成長が何等達せられていないのに気がついたからである。

その自覚が先生を禅の道に導くことになった。先生は家から三キロほど離れた八代の檀那寺の臨済宗妙心寺派、東光禅寺の大西道賢和尚の許で参禅することを決意する。

先生の足跡をたどってみると、先生が禅の修業に入られた昭和九年の春、私は野里小学校に入学して先生に受け持たれることになる。八代の東光寺は私の住まいの近くにあった。大分傷んだ白堀から松の木が覗いている古びた寺院で、子供は中で遊んではいけないと聞かされていた。昔から格式の高い寺で、大西道賢老師も名僧と言われた人であった。参禅に入られた先生が、しばらくして授かった最初の公

案が「我とは何ぞ」であった。木村君のところで中西先生の「吾は何者」の署名を見たとき、すでに「教育と禅」を読んでいた私には、このことばを書いた時の先生の心境が痛いほど分かる思いがした。それにしても、改発先生の「正法眼蔵」といい、中西先生の「吾は何者」といい、何と素晴らしい師であり、求道者であったことか。二人ともまだ二十七、八歳の青年教師であったのである。



それとともに、私は木村君の父の立派さにも頭が下がった。今で言えば大学の学長に当たる父が、自ら小学校を訪ねて教訓を、と願

われたのである。自身も教育者であり、学者である父が、わが子の将来を思っただけで、残した署名帳を見て、私は明治人の節度ある、謙虚な、しかも厳しい親の教育愛を感じた。残念ながら今ではそのような親を見ることは無くなってしまった。

◇

昭和六十三年、私はこの年度で四十年近い教職生活を終わることになった。十月、全連小神戸大会が開かれた。最後の全連小参加である。このことを中西先生に知らせたところ、一晩ゆっくり教育談議がしたいからぜひ泊まっていくように、とのありがたい招待を受けた。私は迷惑をかける躊躇したが、せっかくの機会と思つて先生のご好意に甘えることにした。

「今様盤珪さん」は、八年前と少しも変わりなく、豊饒として慈愛溢れる温顔で私を迎えてくださった。多少の緊張感も、奥さん手作りのご馳走をいただきながら先生と一献交わすうちにどこかへ消えてしまい、夜の更ける

のも忘れて話し合った。先生との話は翌朝、朝食まで続いた。

帰りぎわに先生が禅の師と仰ぐ「盛永宗興老師」の「子育てのこころ」という本を頂戴した。盛永宗興老師は富山県出身、臨済宗妙心寺の塔頭大珠院の住職で、花園大学の学長をしておられる高僧である。実は、私は八年前、中西先生にお会いした翌年の全連小富山大会で盛永宗興老師の「禅寺の師弟」という感銘深い講演を聞いていた。「子育てのこころ」は、花園幼稚園の園長も兼ねていた宗興老師が、子育て最中の若い父母を対象に書いた平易で含蓄に富んだ教育書で、私も当時の勤務校、小千谷小学校の職員に紹介して好評を得た本である。

しかし、老師は平成七年六月、七十歳で遷化されたことを新聞で知った。惜しまれてならない。それに中西先生もその前年の平成六年五月に、長年苦勞をされた奥さんを亡くされている。私は、平成八年の賀状に返事がなかったので、先生が

気落ちされておられるのではないかと心配して、伺いの手紙を差し上げたところ、次のような返事をいただいた。気にかけて頂いて申し訳ありません。数え年九十になりまして元気でおります。ひ孫が四人もできて皆元気です。昨年九月に順番が来たのか、高齢者叙勲を頂きました。「今は亡き妻とめでなん菊一輪一杯、友と汲みました。一〇〇歳が目標です。」

その年の三月、私は初めて沖繩を訪れた。終戦時、陸軍經理学校に在校していた元将校生徒の慰霊の旅であった。そのとき、かつて中西先生も初めて沖繩を訪れたとき、凄絶な沖繩戦で若い生命を絶った乙女たちの「ひめゆりの塔」の前で、涙を落とされて詠んだ長歌を送っていただいたことを思い出して、沖繩旅行の写真を同封した手紙を差し上げた。しかし、その返信のハガキが先生の絶筆になってしまったのである。「ひめゆりの塔」の脇にある乙女の像に寄せた先生の長歌と最後の返信の抜粋を記す。

☆ひめゆりの像

三つあみの 髪に鉢巻きりりしさに あどけなさ残る セーラーに 誇りを秘めて くだびれしもんべにズックは 過ぎ越しし 看護をかたる つつましく しかも端正き然とし 立てる姿よ眉あげて はるかを見つむ 澄みに澄む 瞳に映るは 大いなる 不滅のいのち 万物を はぐくみ育つ 温かき 愛の女神ぞ 我等また 愛(は)しき子と生(あ)れ 傷つきし 兵士をいやし 御ころろに ひとりと添いたり わがころろ しずかに安らぎ 法悦の よろこび深し 友垣と 手をたずさえて 今し今 帰りならんざと ほほ笑みて 立てる姿よ かくて果つ 洞窟の中

反歌

ひめゆりの 乙女 かなしや とことわに その心ばえ 語り語らむ (平成元年五月一日 中西徹朗 以下、次号へ続く)

「インド仏跡巡拝の旅」報告記

このたびの旅に参加できなかつた皆様にお釈迦様の聖地、インド旅行の報告をいたします。どうぞ紙上旅行をお楽しみください。

一日目(二月二十一日)長岡を六時二十八分発の新幹線で出発。成田でのエアラインディア機はたっぷり給油中で一安心。正午に離陸、右窓遙かに夕日に輝くヒマラヤの峰々を遠望すると、約八時間かけてようやく暗くなつたデリー空港に着陸。ホテルへバスは向かう。

二日目(二月二十二日)早朝五時デリーのホテル出発。再び空港より、パトナへ離陸。ローカルなパトナ空港からバスで「ナーランダ大学跡」へ向かう。平らとは言えない道路は人、馬車、荷車、牛、軽三輪、軽四輪、トラック。乾季の砂ホコリに舞い上がるゴミ、車の鳴らすホーンで騒然としている。沿道の集落では小さな屋台が軒を並べてい

る。「終戦後の日本の通りを思い出す」と懐かしむ年配の団員の声も。

「ナーランダ大学跡」の遺跡。七世紀、僧玄奘(西遊記の三蔵法師のモデル)が滞在した時は一万人の僧が学ぶ世界最大の大学だった。レンガの土台が残る広大な遺跡は仏陀を慕って修行に励む僧たちの往時を忍び、深く頭を垂れる団員もいた。写真は遺跡に苦行をねぎらうかのよう



パトナからラジギールへ。お釈迦様が弟子たちに悟りを説いたと言われる岩山、「靈鷲山」にフーフーいながら登った。山頂では、方丈様と石田師に続いて全員で般若心経を唱える(写真)。荒々しい乾季の立ち枯れた周

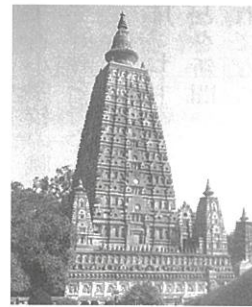
囲の山々に読経はこたまして行つた。その後、マガダ国のビン・ピサーラ王が寄進したと言われる「竹林精舎」、「王幽閉跡」を見学、夜ブツダガヤのホテルに到着。



三日目(二月二十三日)八時ブツダガヤのホテル出発。仏陀が沐浴した「尼蓮禪河」は乾季で水が全くなく、乳粥供養を受けた「スジャータ」

「前正覚山」を見学後、世界遺産登録の「大菩提寺」に向かう。仏陀が悟りを開いた「金剛宝座」を包むようにアショカ王が紀元前三世紀に立てた大塔がそびえる。宝座を覆う菩提樹の下、チベット、タイや東南アジアの国々、西欧人等様々な人種の僧や仏教徒が読経、祈りを捧げている。チベット僧と一緒に五体投地をする団員一名あり。その後、日本の宗教機関が建立し

た「日本寺」で無料診療所、無料幼稚園を見学。バスでベナレスへ向かう。夜、皆ぐつたりとベナレスのホテル着。



四日目(二月二十四日)ベナレスはヒンドゥ教の聖地。早朝、川原のガート(沐浴階段)に向かう。御来迎を浴びながら巡礼者の沐浴風景見学。沐浴を決定した団員一名あり。

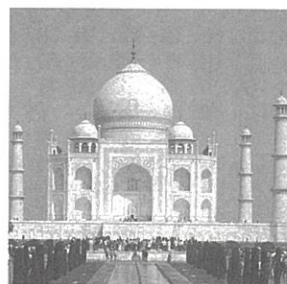


その後、仏陀の初転法輪の地「サルナート」へ向かう。仏

陀、初の説法は五人の修行者と森の鹿だった。「ダメークの塔」博物館など見学し、アグラ駅でバスから降りる。夕方一時遅れて寝台列車は出発。写真は頭にスツーカーを二つ載せて駅へ運ぶポーター。そして寝台車で健気に(?)笑顔を作る団員数名。



五日目(二月二十五日)十四時間かけて寝台列車はアグラに到着。バスで、インドでいや世界で最も美しい建造物と言われる「タージマハル」に向かう。ムガル帝国の皇帝シャール・ジャハーンが死んだ愛妃のために立てた白い大理石の壮大な廟である。一番高いところは六



十七メートルの巨大な建築で街のどこからでも臨むことができる。十万人の職人が延べ二十二年の歳月を費やしたので、帝国は傾き、皇子によって父・ジャハーンはアグラ城(こちらでも世界遺産)に八年間幽閉され、死を迎えた。彼はタージマハルの脇を流れるヤムナー川対岸に黒い大理石で同じ自分の廟を建て、橋で結ぶ計画だったというからスケールが違う。

アグラのジャイピーパレスホテルは広大な庭園と素晴らしいインテリアでジムやマッサージ・スパも備わっている五つ星ホテルだった。連日の移動や時差ボケ、疲労、ストレスでこの頃より体調不良者続出。が、女性団員のみ変化なく、インド流にと右手で食事、左手を不浄の手、と使う者もいた。

六日目(二月二十六日)ア
グラをバスで出発。首都デリ
ーに戻ってきた。第一次世界
大戦の犠牲者の名を刻んだ
インド門、インド独立の父ガ
ンジー師が暗殺された地、今
は記念館となっている、を見
学。イギリスの植民地として
虐げられ、カーストという身
分制度が厳然と残る国。日本
の十倍の国土に日本の八倍
の十一億人が住む国。最先
端のIT産業が発達し、反
面、一日百ルーピー(二百円)で
物乞いになっても生きてゆ
ける国。ヒンドゥ教、回教、
仏教、キリスト教…、宗教の
るつぼでもある国。等、お釈
迦様の足跡を辿りながら、深
く瞑想できた素晴らしい旅
をありがとうございました。
空路、成田へ離陸。日本食が
恋しい…。

七日目(二月二十七日)早
朝成田着。バス(なんて乗り
心地のいいバスと道路なの
か…)で午後、長岡着。

現地ガイドのガンビルさ
ん、何かと気遣っていただ
いたピーエス観光の飯泉さ
ん、お世話になりました。読

者の皆様、次回の旅はぜひ
ご参加くださいね!

【参加者の感想・ひと言集】
大崎さん「アグラ城、タージマ
ル、ナランタ大学良かった。毎日
カレーは飽きます」。

横坂さん「タージマハル感激
一回では見切れないのがインド
ですね。また来たい」。

阿部さん「霊鷲山で皆でお経を
唱和したのが感激でした。ちょっ
とバテました」。

築井さん「ああ、天竺に訪ない来
れるとは思わず。訪ない来たる
六日は煌く一夢」。

間野さん「貧富の差がすごい。そ
の意味では日本はいいですね。夜
行列車は辛かった」。

井上さん「タージマハル、農村風
景、街の露店、人々の活気。皆よか
った」。

浅野さん(ご家族三名の代表で
ご主人に)「インドのパワーを感
じました。仏陀が悟りを開いた金
剛宝座には感動しました。勉強し
てまた来たいですね」。

大谷内さん「三天山(牛糞、ゴ
ミ、瓦礫)にびっくり。でも環境に
は影響ないのかも」。

高橋さん「トイレットペーパー
持参する必要なかった。タージマ
ハルは神秘的だった」。

加瀬さん「大塔の五体投地、ペナ
レスでの沐浴、右手でカレーを食
べる。犯人は私です」。

誰に導かれたんだらう? 浅野ゆうこ

ブッタガヤの聖地で、金
色に光る大きな釈迦像に出
会い、ふいに胸を締めつけ
られるような感動を覚えま
した。なんとというありがた
いお姿…。知らずのうちに
涙があふれます。自分がち
っぽけで弱い存在に思え、
その私をすっぽり包み込ん
でくれるような安心感。「た
どり着きました」と釈迦像
に言ってみました。お釈迦
様は少しニコリしてくだ
さったように見えました。

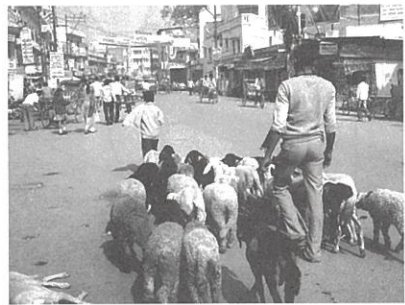
お釈迦様の聖地は山や農
村が多く、デコボコ道をバス
に乗るのは苦行でしたが、車
窓から見える人々の暮らし

石田さん「霊鷲山では、お釈迦様
の歩いている姿が目に見え、感
動しました」。

森田さん「大塔の菩提樹の下。
悟りの場所に浄土を見ました。素
晴らしい旅でした」。

西沢さん「貧富の差、ゴミ、カル
チャーシヨックの連続でした。最
後、体調崩しました」。

飯泉さん「無事に旅行が終わり
ほっとしました。勉強になったこ
とと思います」。



ぶりがおもしろく、見てい
て飽きません。牛やロバ、ヤ
ギなどの動物が気ままに歩
き、色とりどりのサリーを
着た女性が農作業をしてい
ます。簡素な家やお店は埃
にまみれ、たたずまいは貧
しいのですが、どこも生活
実感にあふれ、「生きていく」
がしつかりありました。

動物が野垂れて死にそう
になっている姿に何度も出
くわしました。動物好きの私
はいたたまれないのですが、
なすすべがありません。やせ
細った物乞いの老人や、病氣
の子どもなども、どうしてあ
げることができません。私
は日を追うごとに苦しくな

つて、方丈様に「つらそうな
人や動物に出会ったとき、
お釈迦様はどうすればいい
とおっしゃっているのです
か?」とお聞きしました。方
丈様は「生、老、病、死」は誰
にでも起きること。いい悪い
ではなく、受け入れるだけ
と教えていただきました。
病氣は治すもの、死ぬのは
気の毒…、そう思っていたけ
れど、その私にも同じことは
起きます。すべての生き物に
老いや死は訪れる。それは
悩むことでも憐れむことでも
なく、ごく自然なこと。な
るほど。方丈様のお言葉で
ストンと腑に落ちました。

私が日本に生まれたのも、
目の前の痩せた老人も野良
犬も、自分で境遇を選んだ
わけではないし、生きる根
源的な苦しみはみな同じ。
与えられた境遇の中で、それ
ぞれの生をまっとうする。そ
していつか訪れる老や死。
その姿に「くろうさま」と
手を合わせよう、そう思い
ました。

便利に慣れきった私にと
っては過酷(?)な旅でした
が、インドに行けて本当によ
かった。多少のことには「だ
いじょうぶ」と笑えるよう
になりました。貧しくても力
強く生きるインドの人々や、
ガンジス河での火葬など、
「生、老、病、死」を目の当た
りにし、生きることも死ぬこ
とも、あまり不安がなくなり
ました。なるようになる。ふ
ところ深きインドの地を方
丈様をはじめ、すてきな方々
と旅をしたことで、たくさん
のことを感じ取ることがで
きました。

「誰に導かれたのだらう」。
きつと先立った息子が軟弱
な母親を見るに見かねて、イ
ンドに引張ってくれたの
でしょう。ありがとうございました。
ドの地で母は少したくまし
くなり、あなたの死も受け
入れられそうだよ。

お別れ

(平成廿一年十月廿二年)月未

佐藤 稔様 十二月廿六日寂

千葉県市川市

石田 貞夫様 二月二日寂

長岡市上岩井

ご冥福をお祈りいたします。

古き良き時代を懐かしみ、 明るいい明日を思う！

高橋利春

世の中が大変めまぐるしく変化し、一日の二十四時間さえも短く、年を取ることまで早いように感じています。コンピュータのボタンを押すと世界各地の情報が見られ、株まで購入出来る時代になった。

でも、昨年は経済のデフレ傾向が続く、何もかも「安ければよい」「競争しないものは不正だ」と政治とマスコミ報道が極一部を取り上げ全てがそうかのごとく、面白おかしく連日報道し続け、ついには「失業者が大変だから年越し費を配ろう」「子供が生れないから子供に手当を配ろう」、外国で作れば安くなるので日本で作らず外国でと、年々物が安くなり、ついに一部の店ではジーンズが1本980円、牛丼が280円等全て安価で、財産価値のある土地・建物も下がる一方である。果たしてこれで良いのかとい

うことだ。

公共事業は悪だと決めつけられて年々事業予算も減額されて、建設産業に携わる一人としてはたまつたものではない。一部の公共事業と大手ゼネコンと政治家等、悪い部分もあるかも知れないが、一般の公共事業や地方では景気対策として最も有効な施策と思う。関連事業者や労働者等最も多く波及効果も高く、将来必要とするものを造るので無駄がなく、災害時の対応や準備も整うものだ。

一年六場所完全優勝したことのある横綱・朝青龍が引退した。強ければ多少羽目を外しても良いだろう、と親方も「打ち出の小槌」を甘やかすすぎたのかも知れない。私の子供の頃の昭和三十年代の横綱朝潮、栃錦、若乃花が懐かしい。ゆつたりと下位の関取を胸で受け止めて、それから押したり投げたり、

暖かく堂々としていたように思える。

その頃、3億円強奪事件もあり、死傷者も出さず、3億円あれば一生利息で生活できると言われていたが、この低金利ではどうして暮らしていることや、可哀想にも思う。算盤とタイガー計算機の時代に3億円である。



私は中学、高校土木科と進み、就職した。昭和四十年に建設省長岡工事事務所に

たら何処まで被害が及び、推定被害額が何億、何十億だと昼6枚もあるような地

入省し、量水標の設置や、魚野川根子屋の堤防等、その頃は直営で堤防法線等の打設を命じられ砂利の河原に木杭を打ったが、なかなか真つ直ぐに入らない。また、水泳パンツ一つで量水標の目盛板を取り付け、そして現場までの道程は国道でも砂利道で後ろの車は砂煙で夏でも窓を開けられなかった時代であった。

一番の思い出は信濃川経済調査のとりまとめであった。信濃川が何処で破堤し

図を張り広げて浸水深を描き算定した。我が給料がひと月一万二千八百円の頃の話である。千秋が原の河川敷の問題が起きていた時代であった。

相当の残業をしてとりまとめ、本省への提出であるが、風呂敷包みで20kgくらいはあったと思う。朝一番に届けることになった。一年先輩のKさんと二人で風呂敷包みを抱えて夜行列車に乗って本省へと向かったのである。緊張してあまり良く寝られなかったようであるが、朝の5時には上野に着いてしまった。

一番列車はまだ動いていないし、深夜喫茶など皆無の時代である。駅前で風呂敷包みを抱えてキョロキョロと休み場所を探している。お巡りさんの職務質問に掛かってしまい「手荷物を開いて見せろ」とのこと。皆さんが見ても分かる代物でないし、これから建設省の本省に持参する物であるといつても聞き入れられず、とうとう交番に連れて行かれ、風呂敷包みを広げさせられ、手

に取ってようやく納得されたのであった。お陰様で交番でモーニングセットを食べ、て無事書類を届けた記憶は忘れられない一件であった。

その他、二晩に二回警察に捕まり(職務質問も含め)帰されたりしたこともあったが、昔は人々が暖かかった。お金はなくても分相応に楽しく暮らしてきたようだ。役所を辞めるきっかけは信濃川の定期横断測量でした。東京の測量業者が二名で三ヶ月位滞在して、ガッチリと稼いでいる姿を見て、自分も測量したり設計したり、己の力で精一杯働いてみたいと思い、役所を飛び出してしまいました。お陰様で測量・建設コンサルタント・登記等ワンストップサービスの行える会社「高橋調査設計(株)」も設立三十周年も終えて、次の世代を迎えようとしているところです。

世の中厳しそうですが、愚痴を言っても始まらない。人を思い、人に感じられるよう、明るく明日に向かって行きましょう。

旬歌 愁灯

[二十五話]

マントラ(沐浴の呪文)

加瀬由紀子

「ベナレス」…そこはヒンドゥ教の最大の聖地、三千年の歴史を持つ聖都である。女神シヴァ神の額の三日月形に曲がる印にあるのがこの街だそう。ガンジス川は源をヒマラヤ山脈に発し延々二千五百キロを枯れることなく流れる。川は神格化され、人々は「ガンガー」母なるガンジス様と呼ぶ。ヒンドゥ教徒はガンガーの火葬場で死者を燃やし、その灰を流すと罪人でも解脱できるのだという。

ある者は延々と歩いて、またある者は何日も汽車に揺られて、或いはバスで交通事情の悪い道路をホーンを鳴らしまくって割り込み、割り込まれ、寝そべる牛や羊の群れ、ロバや馬、果てはラクダや象にまで引かれた荷車や、おびただしいトラック、屋根まで人がはみ出している乗り合い軽四輪、三

輪の間を縫って巡礼者はベナレスを目指す。

死者を伴った富める者、貧しい物乞いとなり死ぬ地として来る者、年間百万人と言われる様々なカルマ(業)を抱えて救いを求め、祈りにやつてくる巡礼者。それらを見る観光客。ベナレスのガート(ガンジス川の岸辺に設けられた沐浴のための階段広場。八十近いガートが設けられている)は終日ごったがえしている。

このたびの安善寺様のインド旅行に参加した私の目的のひとつは、「ガンジス川でバタフライ」をすることだった。しかし、先立つ旅行説明会で、添乗員氏他全員にやめるように注意を受ける。確かに祈りを捧げている脇で泳ぐ水着の女性は罰当たりだし、水も汚い。

そこで密かに考えたのは、「ガンジス川でサリーを着て

沐浴する」という更に危険な挑戦だった。仏教と比較するためにはヒンドゥ教を理解する最良の機会、などと意気込む。まずはベナレスのホテルの売店で、しつこく値切り、サリーを購入。翌朝団員のTさん、Oさんから着せてもらう計画で眠りに着く。

まだ暗いうちにモーニングコールが鳴り仕度を始めた、と言いたるところだが、再び寝てしまい、遅刻。ガイドさん、添乗員氏に文句を言われながら既に全員乗っているバスに駆け込む。サリーは当然着ている時間もなく手にしては来たが、計



沐浴する筆者

画は大幅に狂い、参加者全員は「これで人騒がせなスィム行為は止めて、おとなしくみんなでポート見学に参加だな」と安心？ していたようだ。

さて、夜明け間近の川べりでバスから降りて、ガートへ向かう。鐘の音、鳥のさえずり、ポート漕ぎの客引き、物売りや物乞いの声、巡礼者のマントラ(お経を詠む声、お香の匂い、立ち昇る煙。騒然。ビーチパラソルのような大きな竹の傘で覆われた縁台がたくさんガートに並んでいる。

朝日が昇り始めた。「沐浴やります！」私一人を残し、団員全員あきれ顔で、ポートに乗り対岸側へと離れてゆく。周囲はインド人多数、「なんだ、こいつは」という視線で私を見ている。

見渡せば人の良さそうなオパチャングループ発見。英語通じず、身振り手振りで沐浴したい旨説明、笑顔で了解となり、サリーを着せてもらう。縁台のお金は自分たちが払ったからいらぬ、とどこまでも親切な

人たち。ラッキーだ！縁台の長老が私の額に赤い色粉で印を付け、花の首輪を掛けてくれる。英語を話せる彼の従者？ が戻って来た。沐浴の仕方を教えるという。うる覚えで沐浴開始。

まずは花、火のついたローソクが入った皿を流す。川に入り水で口をすすぐ。(問題の水、死体が流れてくるのを気にしながら)そして教わったマントラ(呪文?)を唱えながら水を八回頭に撒く。次に三回、頭まで入り太陽に礼拝する。最後に差し出した親指と人差し指で円を作り、瞑想する。

「永遠なるガンガーよ、我が母、父、娘、家族(それぞれ名を言う)に幸福な人生を願う。シヴァ、ビシュヌ、ガネイシャ、ヒンドゥの神々に願う。我、カルマ業を洗い落とし、来世の輪廻転生を願う。ガンガーよ、オーム(南無阿弥陀仏に当たるお題目)。祝福あれ。」要約するとこんな内容を唱えた。水から上がる周囲のインド人たちが拍手。嬉しく、ジーンとこみ上げるものがあつた。

ボブの独り言

雪国だから判る、春の訪れの素晴らしさ

ボブの独り言

マスコミで伝えられた今年の降雪量は、一時的には多かったものの例年から比べるとさほどでもなかったとの事。

私は雪が降ってもトイレの心配はないのですが、いつときどきカ雪だった数日間、犬はその都度外に出て行か



なくてはならないため、サクラは家の周りの降り積もった所で用足しをする場所を探すのが大変！それに連れ添って雪の中、外に出て行くお母さんも大変。コートを着て、長靴を履いて、万全の準備をしてから出て行くのですから。今は近隣のお宅

でも犬を飼っているところが多くなりましたが、大変だった事とお察しいたします。雪国に生れ育った人でさえ久しぶりに降ったドカ雪に、空を眺めては溜息を吐いていたくらいですから、まったく雪を知らない、それも日常生活に長靴などは無縁の所から嫁いで来て、初めて迎える冬、それも新婚なのに副住職が留守だった久美さんは泣き出したくらいに心細かったと思います。「せめて今冬は雪が少ないと良いね」と話していた住職とお母さんの願いもむなしく、来る日も来る日も降り続く雪にだんだんと元気がなくなり落ち込んでいく姿になす術もなく、「新潟の空は低くて狭い」とポツリ！可哀想で何とも言葉になりませんでした。

そんな話をお母さんがお

第五十号、夏号は平成二十二年七月十日(土)発刊予定です

檀家さんになると、お檀家さんの中でも雪のない所から嫁いで来られた人が結構いらつしやって、「我が家のお嫁さんも雪で三年泣きました、やっと慣れました」等々、でも雪は春になれば跡形もなく春の訪れの素晴らしさは雪国の人にしか判らない喜びがあるのです。

庭の奥の少し残っている雪の下からは路の藁が顔を出し、玄関脇には福寿草が芽を出し始めました。とても長い三ヶ月でしたが、副住職も涅槃会には皆様にアメリカでの体験談をお話しできると思います。そして雪のことなど忘れたかのような笑い声が聞こえてくる日がすぐに来ることでしょう。 ニヤーン！

編集 雑感

季刊誌を世に送 出してかなりの年月が経ちました。時代は変わっても変わらな いたのが親子の情と思ってい ましたが、最近では事情が 変わってきたように伺いま す。どれが良くてどれが悪い のではなく、基本的な考えが 変わって来たようです。

若い人は年寄りを養うこ とが当然の時代がありまし た(今でもあると思います が)、年金や貯蓄によって、親 自身の自活能力が高くなっ たからでしょう。更なる変 化は核家族化とともに、夫 婦のみや、独り暮らしの老 齡者が飛躍的に多くなって います。福祉が充実すれば するほど家族関係に影響が 出て来ます。ものや現象で果 たして、真の心の豊かさが

得られるのでしょうか。子や 孫と同居し共通の話題を持 ち、心置きなく家族団らんす ることには及びません。 そこで重要なのは、その家 族の雰囲気や永く保つため には、親は常に「和の心」を持 って家族に接することが本 (もと)であります。そして子 は親に対する「敬の心」を忘 れないことです。そうすると 孫はその親の祖父母に対する 後姿によって自ら学び取る ようになります。しかし、 親は老来ますます子や孫の 敬愛に値する品格を養うべ く、自己研鑽を心掛けること が大切です。日本の高齢化や 少子化は益々複雑な問題を はらんでいます。

今の世は戦後教育によつ て生まれた大人達が大半に なりました。GHQの作戦 通り日本人は骨抜きにされ ました。教育は直すまで百 年かかります。長岡には米 百俵の精神がありました、 仏教界では啓蒙運動に乗り 出しています。本来あるべき 姿を取り戻すことが大切で す。季刊誌はそんな役目もし ています。

お便り原稿用紙

季刊誌では、増信徒・読者の皆さまと、ごいっしょに誌面をつくりながら、コミュニケーションを深めたいと思います。ハガキまたはお手紙、ファックスなどで、お気軽にお便りをお寄せください。お待ちしております。

原稿の例

- 思い出話／ご家族、ご先祖、お寺の思い出話など。
- 私に言わせて／家事や子育てのお話、身近な出来事など。
- 教えてください／仏事のしきたりや疑問(編集部や住職がお答えします)など。
- 嬉しい・楽しい嬉しかったこと、悲しかったこと、怒ったこと。

小林国二拜